



倭国王も公認!? 「纏向遺跡」の調査情報誌

# 纏向考古学通信

Vol. 13

## 「卑弥呼その後」－東京フォーラムⅧの開催に向けて－

纏向学研究センター所長 寺沢 薫

「年が十三才の卑弥呼の宗女である「壹與(壹与)」を立てて王と爲した」。3世紀の後半、晋の陳寿によって編纂された中国の正史である『三国志』の「魏書」倭人の条（一般に「魏志倭人伝」と言われるもの）にはこのような記述が出てきます。

正始8年（西暦247年）頃、卑弥呼が亡くなると男の王を立てたけれど、国々のなかにはこれを不服とする国があって争乱状態になってしまった。そこで卑弥呼の親族であるうら若き少女である「壹与」を王にすることで治まったというのです。

そして、魏王朝の使者である張政は、魏帝からの檄書（木札に書かれた公文書）を壹与に渡し教諭した。壹与は大夫らに命じて、魏帝への献上品とともに張政らが魏の都である洛陽へ帰還するのを送らせた、という記事が続きます。漢字2000字足らずの倭人伝最後の下りです。

ところで、「壹與(壹与)」と書かれた現存する二つの「魏志倭人伝」の写本は12世紀に作られたもので、「邪馬臺(台)国」も「邪馬壹(壹)国」となっています。ところが、7～8世紀のより古い時期に編纂された『北史』、『梁書』、『翰苑』、『通典』には、「邪馬臺(台)国」、「臺(台)与」と書かれているため、「臺與(台与)」の方が正しい本来の記名だとの考えもあります。今回のフォーラムでは「臺與(台与)」で通したいと思います。

副題に「卑弥呼その後」と銘打った今回の東京フォーラムのタイトルはまさに冒頭の女王台与擁立を宣言する文言です。女王卑弥呼が亡くなった後の争乱状態というのは具体的にどのような状況だったのでしょうか、そうしたなかでなぜうら若き宗女台与が選ばれることになったのでしょうか、台与とは一体どのような女性だったのでしょうか、そのとき東アジアの国々や国内の政局はどのような状態だったのでしょうか、そして台与政権の実態とその後は……。興味は尽きません。

従来の議論はともすれば、「邪馬台国」の問題や「卑弥呼」に関する議論に目が奪われてきたきらいがあります。しかし、倭人伝での記述が断ち切れる3世紀後葉から末にかけての台与政権とその後の実体を明らかにすることこそ、むしろ古代史上の大きな課題だと思われてなりません。まさに世に言う「謎の四世紀」への入口なのです。

今年の10月27日（日）に有楽町のよみうりホールで開催される予定の東京フォーラムⅧでは、こうした興味深い問題を、レギュラーの刈谷俊介さんの全体講演を皮切りに、赤塚次郎さん（NPO法人古代



瀬波の里・文化遺産ネットワーク理事長)、寺沢知子さん(神戸女子大学教授)、仁藤敦史さん(国立歴史民俗博物館教授)の3人の先生にそれぞれの視点からお話しいただき、私のコーディネートでディスカッションしていただくという企画です。いままでなかなか議論されてこなかったテーマへの挑戦です。はたして謎の四世紀史の扉をこじ開けることができるか。多くの古代史ファン、そして縄向ファンの方々の参加をお待ちしております。

ところで、縄向学研究センター設立以来続けてきた東京フォーラムも8回を迎えることになりました。第一期は「縄向出現」と題して、邪馬台国の所在地をめぐる「縄向に卑弥呼がいたなら」「卑弥呼は九州にいたか?」「邪馬台国東遷説を考える」の3回、第二期が「卑弥呼発見!」と題しての「倭人伝」に記載された文言をテーマにした「宮室、楼観、城柵、巖かに設け…-卑弥呼の居処-」、  
「鬼道を事とし、能く衆を惑わす-卑弥呼の鬼道-」、  
「親魏倭王卑弥呼に制詔す-卑弥呼の外交-」、  
「卑弥呼、以に死し、大いに冢を作る-卑弥呼の墓-」、そして今回を含めた5回です。今回で第二期も無事完結することになりました。

さてさて、ここらで少し休憩と燃料補給をと安閑にも思いきや、市長さんから間を空けずには是非継続するよにとの強いお達し、そして何よりこのまま続けてほしいというファンからの熱いエール、こうした皆様のご期待と地方創成の戦略に絆されて、目下、第三期を思案中です。

桜井市は縄向遺跡に限らず古代から近世の多くの重要な文化財を抱えています。それは考古資料としての遺跡や遺物だけでなく、建造物、絵画・彫刻・工芸品、書跡・典籍、古文書、民俗・芸能、天然記念物などにおよびます。桜井の歴史や文化財が全国に発信できるものは多種多様です。

とはいえ、学界や多くの歴史ファンの方々、メディアの方々「縄向学」を標榜する当センターに期待するものが、王権誕生のすがたやこの国の成り立ちの解明、日本文化の原像への憧憬にあることは間違いありません。第三期は、もう少し大きなテーマに関わってみたいと思っています。ご期待下さい。

## 桜井市縄向学研究センター 東京フォーラムⅧ 「卑弥呼」発見!

### 『卑弥呼の宗女台与、年十三なるを立てて王と為す』-卑弥呼その後-

日時：令和元年10月27日(日) 10:20~16:00

場所：東京都千代田区有楽町 よみうりホール

講演：苅谷俊介氏「卑弥呼以後-崇神大王の時代到来-」  
寺沢知子氏「男王〈共除〉と台与〈共立〉-女性首長の実像-」  
仁藤敦史氏「卑弥呼没後の倭国-東アジア情勢を中心に-」  
赤塚次郎氏「247年 東海六部族とその行方」

シンポジウム：『卑弥呼の宗女台与、年十三なるを立てて王と為す』-卑弥呼その後-

コーディネーター：寺沢薫



## 《発掘調査の概要》

### 纏向遺跡第195次調査 多量の土器！多量の木製品！！

#### 1. はじめに

この調査は、平成30年10月30日から平成31年1月22日にかけて行いました。調査地は遺跡のほぼ中央に位置する太田微高地上に位置し、近年まで耕作地として使用されていましたが、周辺では宅地開発が進行しつつあり、本調査地の近隣でも過去に発掘調査が行われています。このうち、本調査地東側の旧太田池で行われた第149次調査では、3世紀前半の井戸状遺構から朱塗りの盾や鎌柄などと共に木製仮面が出土しています。

また、本調査地の西側で実施された第191次調査では、調査区の西端で幅6m以上となる大溝状遺構などが検出されています。今回はこれらの調査地に隣接した場所での調査となりました。



写真1 調査区と三輪山（西から）

#### 2. 調査の成果

調査の結果、3～4世紀の溝や土坑、柱穴などが多数見つかりました。調査区の中央付近からは、北東から南西方向に走る幅約3m、深さ約1mの大溝を検出しています。大溝の埋土の上層からは「コ」の字状に打たれた杭が出土しています。これは上流から流れてきた水の勢いを弱めるためのものだったのでしょうか。埋土の中層からは土器と共に木製盾が出土し、埋土の下層からは鞘などの刀剣装具や梯子などの木製品のほか、編み籠かごや鹿角製の柄つかなども出土しています。

この他に、3世紀後半頃の井戸も見つかりました。一辺約50cmの方形の井戸枠を持つ井戸で、北から北西にかけては石敷きが設けられています。井戸枠は長さ約1.3mの縦板で、全て建物の部材が転用されていました。井戸枠内からは土器が一部欠損した状態で出土しており、この土器は井戸廃棄時の祭祀で使用されたものと考えられます。また、井戸枠の下部には板を杭で留めて構築した集水施設が一回り小さく造られていました。集水施設内の埋土には小石や土器の破片が混じっていたことから、当時、湧出する地下水を浄化する機能を持たせていたと考えられます。

今回検出した大溝や井戸以外にも土坑や柱穴といった遺構が多数検出されています。いくつかの土坑から



写真2 大溝  
杭や木製品が出土したようす  
(南西から)



写真3 見つかった井戸枠と土器  
(東から)



は、ほぼ完形に近い甕や小型器台・ミニチュア高坏などが出土し、盾・<sup>よこづち</sup>横槌・<sup>もくぞく</sup>木鏝・<sup>すき</sup>鋤・<sup>たてぎね</sup>竪杵・舟形木製品・<sup>ほぞ</sup>柄がある木製品などが出土しています。また、土器や木製品以外にもガラス玉・銅鏝・ト骨といった貴重な資料が見つかりました。ト骨は第183次調査でも出土しており、今回見つかったト骨は纏向遺跡では2例目になります。調査区の東端で検出された土坑からは、板材や梯子、柄のある木製品と共にタコ壺が1点出土しました。纏向遺跡周辺には海がないことから、このタコ壺は海に面した地域から運ばれてきたのでしょうか。

### 3. まとめ

今回の調査により、調査地周辺が纏向遺跡の中でも遺構の分布密度の高いエリアであることが確認できました。また、これまでの調査成果から、太田微高地の遺構の様子が明らかになってきました。本調査地の東側、旧纏向小学校跡地は、メグリー号墳や方形周溝墓などが検出されている墓域であり、ここより西側の旧太田池で行われた第149次調査地や本調査地では、祭祀土坑が多く検出されるようになります。本調査地の西側で行った第191次調査区の中央から西端にかけては、纏向遺跡の存在する扇状地の先端にあたることから遺構が希薄になっていくと考えられます。この太田微高地上では大溝や土坑などから祭祀遺物が多数検出されているため、調査区周辺にも祭祀に関連する遺構が存在している可能性があります。今後のさらなる調査で太田微高地の具体的な様子を明らかにしていきたいと思えます。

(西村知浩)

## 纏向遺跡第196次調査 稲荷山古墳第1次調査

### 1. はじめに

稲荷山古墳は、現況で直径約20m・高さ約3mの円丘状の高まりが残っている古墳で、現在は墳丘上に稲荷社が祀られています。以前から古墳と認識されていましたが発掘調査はおこなわれておらず、古墳の形や時期についてはわかっていませんでした。

周辺には、100m北東に箸墓古墳が、その他に50m北では古墳時代前期後半頃の埋没古墳である箸中イツカ古墳や、200m北では古墳時代前期後半頃の埋没古墳である箸中ビハクビ古墳が存在します。

今回の調査が稲荷山古墳の第1次調査となるため、古墳の墳形や規模や時期が明らかになることが期待されました。

### 2. 調査の成果

今回の調査では、古墳の北側と東側に調査区を6ヶ所設定し、その内4ヶ所で稲荷山古墳の墳丘裾を確認することができました。この墳丘裾を線で見つけて復元すると、古墳の北側は方形であることがわかりました。確認できた大きさは東西約25m、南北は北端から測量調査によってわかった墳丘の残



写真4 稲荷山古墳の周辺（南から）

存部までの長さが29m以上であり、東西幅に比べ南北に長いことがわかりました。また、明治時代に描かれた絵図によると、社が描かれた墳丘の南側に細長い高まりが存在していたようです。これらのことを踏まえると、南側に前方部を持つ前方後方墳の可能性も考えられます。

古墳の築造時期については、出土した遺物が少なく断定することはできませんが、須恵器などの新しい時期の土器が少なく埴輪や葺石がないということから、箸墓古墳と同時期の古い古墳であった可能性も否定できません。

調査では、前方部の存在を確認することができなかったため、現在は推測することしかできませんが、今後も調査や検討をおこない稲荷山古墳の墳形や時期を明らかにしていきたいと思います。

(三沢朋未)



写真5 稲荷山古墳（上が北）

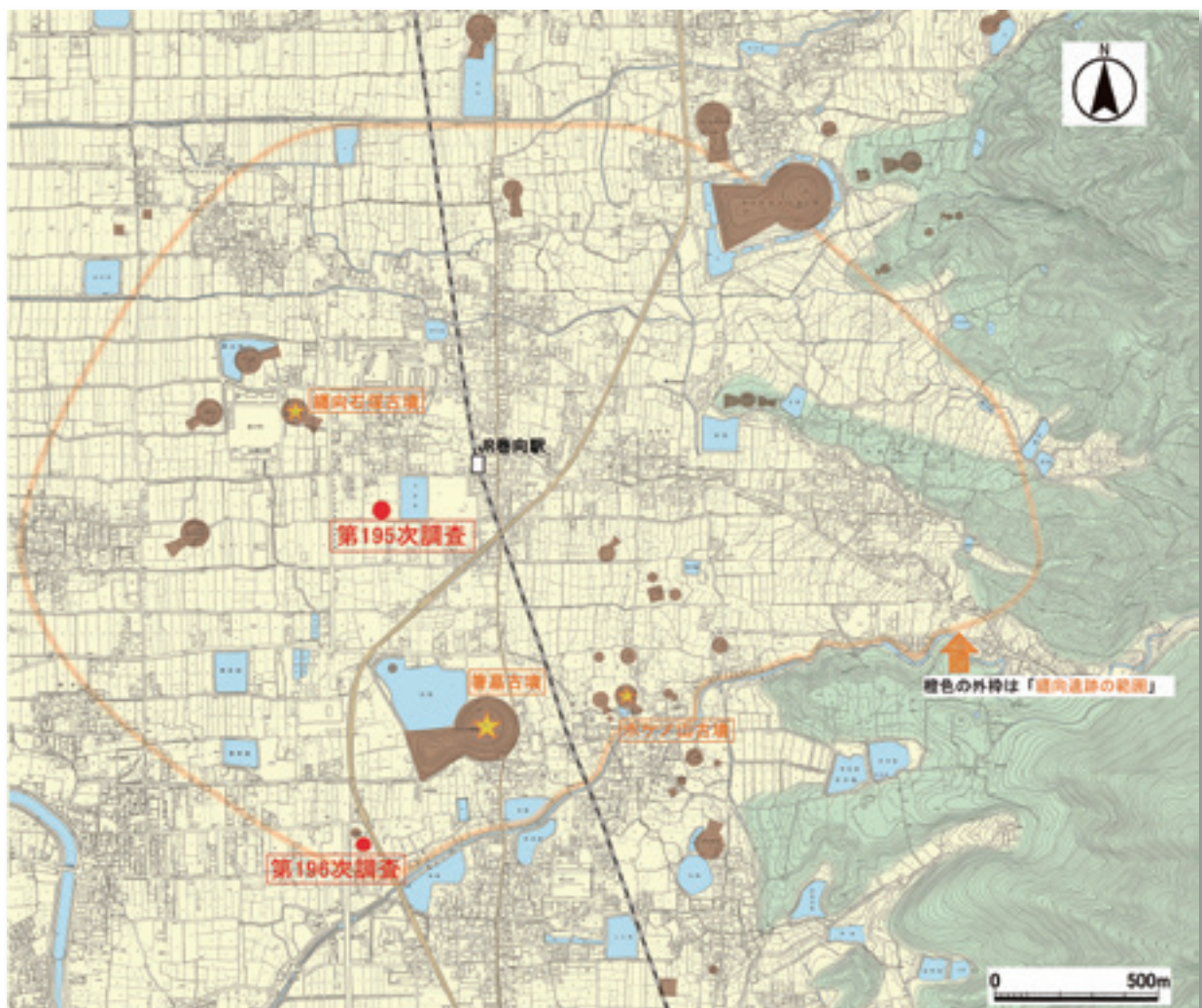


図1 平成30年度発掘調査地



## 《纏向学セミナーを開催しました!》

### ○ 第11回纏向学セミナー「動物からみた纏向遺跡」

2018年7月14日(土)に桜井市立図書館において、第11回纏向学セミナー「動物からみた纏向遺跡」を開催しました。当日は猛暑の中でしたが、約170名の方にお越しいただきました。

このセミナーでは、大阪府立狭山池博物館学芸員の宮崎泰史先生をお招きし、標記の題でご講演いただいた後に、寺沢薫所長との対談を行いました。

宮崎先生は纏向遺跡で出土した輪<sup>わ</sup>鏡<sup>あびみ</sup>やト骨<sup>ほっこつ</sup>、犬の骨について取り上げられ、他遺跡の出土事例などもふまえながら、日本における馬の出現時期やト骨に利用された動物や焼<sup>しょう</sup>灼<sup>しゃく</sup>手法、古代犬の種類や大きさなどをお話くださいました。

対談では、纏向遺跡においてどのようなことがト骨によって占われたのか、纏向犬が一体どんな種類の犬だったのかなど、来場者の想像力を掻き立てるような議論が繰り広げられました。



写真6 講演される宮崎先生



写真7 寺沢所長との対談

### ○ 第12回纏向学セミナー「イト国からヤマトへ」



写真8 講演される柳田先生



写真9 白熱した対談でした

2019年1月27日(日)には、同じく桜井市立図書館にて、第12回纏向学セミナー「イト国からヤマトへ」を開催しました。当日は厳寒にもかかわらず、約300名の方にお越しいただきました。

今回は、國學院大學客員教授の柳田康雄先生をお招きし、標記の題でご講演いただいた後に、寺沢薫所長との対談を行いました。

柳田先生は、自説の年代観を説明した後、福岡県糸島市にある<sup>ひらばる</sup>平原遺跡出土の鏡や近年発見例が相次いでいる<sup>すずり</sup>硯などの事例から「イト国」の先進的な様子を具体的に述べられました。その上で「イト国」と纏向遺跡とのつながりについても言及されました。

対談では、「魏志倭人伝」に書かれた当時の社会状況と、考古遺物からみた社会の状況をどのようにすり合わせていくかなど、熱心な議論が行われました。

## 《東京日本橋 奈良まほろば館でのイベントに参加しました!》

桜井市と天理市、田原本町、三宅町、川西町が文化財や観光の見どころなどを首都圏の方々に紹介するため、各市町の観光・文化財担当部署が共同でイベントを開催いたしました。

会期中はパネル展示をおこない、ウィークエンドスペシャル両日には、約280名の方にお越しいただいた講演会で各市町の職員が地元の遺跡について解説いたしました。

また、古代のお金の鑄造体験イベントでは、親子連れを中心に約160名に鑄造を体験していただきました。和同開珎や富本銭の鑄造に興味深くしておられました。

ご参加、ご協力いただいた皆さま、ありがとうございました。

開催日：平成30年8月9日～8月21日

(ウィークエンドスペシャル：8月18・19日)

会場：奈良まほろば館（東京都中央区日本橋）

担当：森 暢郎

テーマ：「ヤマトの古墳と遺跡～ヤマトの源流を考える～」

内容：パネル展、講演会、体験コーナー（お金の鑄造体験）



写真 10  
イベント「ヤマトの古墳と  
遺跡」のようす

## 《纏向考古楽講座を開催しました!》

平成30年10月6日、11月3日、12月1日の全3回に渡って、毎年恒例となっている纏向考古楽講座を開催いたしました。この講座は、纏向遺跡や地元の歴史を基礎から楽しく学ぶことを目的に、考古学を初めて学ぶ方向けの内容となっています。本年度のテーマは文化財の調査と記録でした。

参加された皆さんは、考古学の基礎知識を当センター所員の解説で学んだり、発掘現場から出土した本物の土器を観察し、白熱した議論を交わしていました。拓本実習では皆さんが素晴らしい拓本を採拓していました。また、纏向石塚古墳や辻地区では、古墳の測量図の見方を学び、平板測量をおこなって測量図を作成しました。さらに、三次元計測や富本銭と和同開珎の鑄造を体験していただき、充実した講座となりました。

本年度の講座を通して、文化財の記録がいかに重要なことであるか感じていただけたのではないのでしょうか。



写真 11 平板測量のようす



写真 12 しっかりと拓本が採れました



## 《東京フォーラムⅦ「卑弥呼」発見！ 卑弥呼、以に死し、大いに冢を作る—卑弥呼の墓—」開催！》

2018年10月14日（日）に東京都千代田区有楽町のよみうりホールにおきまして、東京フォーラムⅦ「卑弥呼」発見！卑弥呼、以に死し、大いに冢を作る—卑弥呼の墓—」を桜井市の主催、読売新聞社・奈良県ビジターズビューロー・歴史街道推進協議会の後援により開催し、約850人の方々に来場いただきました。

「魏志倭人伝」に記された女王卑弥呼に関する記述からその人物像に迫る内容であり、卑弥呼の墓の所在やその墓制などについて考古学や中国古代史を専門とされる先生方を講師としてお招きし、ご講演いただいた後、寺沢所長の司会・進行によるシンポジウムを行いました。

午前の部では、はじめに当研究センターの福辻所員より「箸墓古墳へのアプローチ—調査成果からみた「卑弥呼の墓」—」、続いて京都橘大学客員教授で俳優の苅谷俊介先生より「箸墓築造の謎—最古の巨大前方後円墳—」と題したご講演をいただきました。午後の部では国立歴史民俗博物館教授の松木武彦先生より「前方後円墳はいかにして成立したか」、早稲田大学教授の渡邊義浩先生より「中国学からみた卑弥呼の墓制」と題したご講演をいただきました。

シンポジウムでは、纏向遺跡における箸墓古墳の存在意義や築造の経緯、「魏志倭人伝」を読み解いていく中で明らかとされる卑弥呼の墓の実態などについて講師の方々の意見が飛び交い、白熱した議論が行われました。



写真 13 シンポジウムのようす

## 《桜井ライオンズクラブ様より 掲示板とベンチを寄贈いただきました！》

桜井ライオンズクラブ様より、掲示板とベンチを寄贈いただきました。誠にありがとうございました。誠にありがとうございました。掲示板およびベンチはJR桜井線巻向駅南西の広場に設置しております。

こちらの掲示板には纏向遺跡をめぐる際に便利な情報や最新の調査結果の展示情報などを掲示していきたいと考えています。

また、ベンチは地域の方々や、纏向遺跡を訪れた方の憩いの場として早速活用いただいています。

纏向遺跡を散策の際にはぜひご利用ください！



写真 14 寄贈いただいた掲示板とベンチ



## 《平成30年度纏向学研究センター定例研究集会》



写真 15 研究集会のようす

2019年2月23・24日の2日間、纏向学研究センターにおいて平成30年度定例研究集会を開催しました。この研究会は、当センターの共同研究員や関連する研究者にお集まりいただき、纏向遺跡に関わる研究報告を行うもので、定期的に開催しています。

1日目は、当センター所員より最新の発掘調査状況について報告を行ったのち、共同研究員の金原正明先生に纏向遺跡と植生について、京都国

立博物館アソシエイトフェローの中屋菜緒氏に文化財活用におけるデジタル技術について研究報告をいただきました。また、纏向遺跡出土イヌについては大阪府立狭山池博物館学芸員の宮崎泰史先生より現況報告がありました。

2日目は、元香川県埋蔵文化財センター所長の真鍋昌宏先生より弥生時代から古墳時代の埋葬施設についての研究報告がありました。この分野に造詣の深い奈良県立橿原考古学研究所調査部長の岡林孝作先生をお招きしての討論は白熱したものとなりました。続いて共同研究員の小山田宏一先生より古墳副葬鏡と破碎鏡についての研究報告があり、その後共同研究員の柳田康雄先生より弥生時代から古墳時代にかけての長方形板石硯すずりについて研究報告をいただきました。最新の調査・研究状況を反映した研究報告はいずれも活発に議論が行われるものとなりました。

## 《纏向小6年生を対象に体験学習を行いました!》

纏向小学校は纏向遺跡の中心に立地する小学校で、学校を取り囲むように纏向石塚古墳・勝山古墳・矢塚古墳が位置しています。

2018年4月27日、桜井市立纏向小学校の6年生の皆さんに来所いただき、纏向小校区の遺跡についての学習と古代のお金の鑄造体験の出前授業を行いました。

遺跡についての学習では、纏向遺跡の発掘調査で見つかった遺構や古墳について学び、纏向遺跡で出土した土器を実際に触っていただきました。

古代のお金の鑄造体験では、日本のお金の歴史や昔の作り方などの説明を聞いた後、桜井市内の遺跡より出土した遺物から再現してつくられたシリコン製の鑄型を使って、古代のお金、富本銭と和同開珎を作成しました。作業の合間に出題したお金の鑄造に関するクイズにも、積極的に回答してくださいました。

座って話を聞くだけでなく、鑄造体験や土器を見たり触ったりしながら、校区の遺跡について楽しく学ぶ機会となったのではないのでしょうか。



写真 16 鑄造体験のようす

## まきむく語り 木製仮面の発見①

纏向遺跡を代表する遺物の一つである木製仮面。太田池底の土坑より出土したこの遺物が、宅地造成工事の合間のわずか1日の調査で見つかったことは、あまり知られていないのではないのでしょうか。

その発見は、いくつかの“偶然”の重なりによりもたらされました。第1の偶然は、発見前日の天候が曇のち雨であったこと。このとき担当していた別の発掘調査の作業が中断され、何気なく足を運んだのが太田池の工事現場でした。そこで第2の偶然ですが、ちょうど太田池に到着したその時間帯に、池底のヘド口を除去する作業が行われていました。これにより遠目にも遺構の存在を認識することができ、翌日急遽、調査を行なうことができました。

発見から今年で12年、もし工事の作業工程と天候の巡り合わせがわるければ、木製仮面は今も地中深くに眠っていたのではないのでしょうか。雨は発掘調査を行なう上で恨めしいものですが、時にはこうした意外な成果を生むことがあるようです。（福辻 淳）

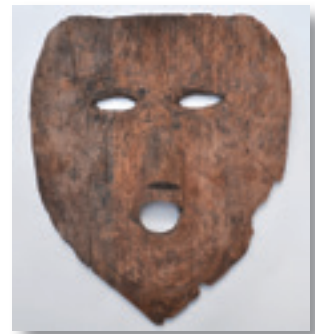


写真 17 木製仮面

## 埋蔵文化財センター展示収蔵室からのお知らせ

埋蔵文化財センター展示収蔵室では、2019年9月29日（日）までの期間、発掘調査速報展25『50cm下の桜井』として、平成30年度に桜井市内で行われた発掘調査成果の速報展を開催しています。今回は今号でご報告した纏向遺跡各調査のほか、古代の官道の一つに数えられる中ツ道が見つかった大藤原京関連遺跡第70次調査の成果などを展示しています。ぜひご覧ください。

開館時間 9:00～16:30（入館は16:00まで） 休館日 毎週月・火曜日及び祝日の翌日  
入館料 / 大人300円 小・中学生 / 150円（20名以上の団体は大人200円 小・中学生100円）  
桜井市芝58-2 お問い合わせ先 TEL0744-42-6005



## 発行物のご案内

- \*ガイドマップ『纏向へ行こう!』 200円  
(2014年3月改訂 第5版)
- \*平成30年度特別展図録  
『がっこうの下には何があったの?』 500円
- \*『赤坂天王山古墳群の研究—測量調査報告書—』 3,000円
- \*纏向学研究センター研究紀要『纏向学研究』第7号 1,000円

※ご購入方法は（公財）桜井市文化財協会（桜井市芝58-2）までお問い合わせください。

お問い合わせ先 TEL0744-42-6005 FAX0744-42-1366  
<http://www.sakurai-maibun.nara.jp/>

## 訃報

2019年6月18日、当センター顧問の菅谷文則先生がご逝去されました。

ご生前のご指導に深く感謝するとともに、心からご冥福をお祈り申し上げます。

## 編集後記

今号では、平成30年度の発掘調査の報告とセンターの活動を中心に、新たにコラムとしてあの重要な遺物の発掘裏話を掲載しました。今号では掲載しきれないお話があるということですので、次号が楽しみです！

C.T

## 纏向考古学通信 Vol.13

発行 令和元年7月1日

編集 桜井市纏向学研究センター

〒633-0085 奈良県桜井市東田339

TEL 0744-45-0590

FAX 0744-45-0590

ホームページは

「まきむく学研究センター」で検索!!